

福島県文化財調査報告書第301集

安積P.A拡幅改良事業

東北自動車道遺跡予備調査報告

勝利ヶ岡遺跡

1994年3月

福島県教育委員会
監 福島県文化センター
日 本 道 路 公 団

安積 P . A 拡幅改良事業

東北自動車道遺跡予備調査報告

しょうりがおか

勝利ヶ岡遺跡

序 文

現在福島県では、「新世紀ふくしま」の新しい交通体系の確立をめざし、高速交通網の整備が着実にすすめられようとしております。平成4年度においては福島空港が開港し、また磐越自動車道も、郡山～会津坂下区間で、すでに開通いたしました。

磐越自動車道は、平成7年度開催の「ふくしま国体」の開会に向けて、いわき～郡山間、会津坂下～西会津間で残りの工事が急ピッチで進んでおります。磐越自動車道の県内全線開通に合わせて、東北自動車道から会津方面、いわき方面に向かう利用者のために、安積パーキングエリアをサービスエリアとして拡張整備することが緊急の課題として浮上してまいりました。

安積パーキングエリアは勝利ヶ岡遺跡上に立地しており、昭和46年の建設に先立って一部発掘調査を実施しておりますが、今回は未調査部分の調査が必要となり、福島県教育委員会と日本道路公団郡山管理事務所との間で保存協議を重ねてまいりました。

福島県教育委員会は本年度、財団法人福島県文化センターに委託して予備調査を実施いたしました。本書はその調査成果をまとめたものであります。

本報告書が、文化財保護ならびに地域の歴史を解明するための基礎資料として利用され、研究資料として広く県民の方々に活用していただければ幸いと存じます。

最後に、本遺跡の調査から報告書の作成にあたり、ご協力いただいた関係機関、関係者各位に対し感謝の意を表するものであります。

平成6年3月

福島県教育委員会

教育長 新妻 威 男

緒 言

1. 本報告書は、東北自動車道須賀川インターチェンジ・郡山南インターチェンジ間に所在する安積パーキングエリアの拡幅改良工事に伴う埋蔵文化財の予備調査報告書である。

2. 調査遺跡とその要項は次の通りである。

遺跡名	勝利ヶ岡 ^{しょうりが おか} 遺跡
所在地	郡山市三穂田町川田字勝利ヶ岡・字西白旗 郡山市安積町牛庭字社場谷地
調査対象面積	45,000㎡
現地調査期間	平成5年5月25日～同年6月15日、同年7月19日～7月20日

3. 当遺跡調査事業は、福島県教育委員会が日本道路公団の協力を得て行ったものである。

4. 福島県教育委員会では、事業に関わる予備調査を財団法人福島県文化センターに委託した。

5. 財団法人福島県文化センターでは、事業第2部遺跡調査課の次の職員を配し調査にあたった。

文化財主査 芳賀英一

なお、臨時的に文化財主事三浦英俊の協力を得た。

6. 本報告書は、芳賀英一が執筆・編集した。

7. 予備調査に基づく開発区域内の遺跡範囲については、関係職員の合議に基づき決定した。

8. 本報告書で第2図・第3図に使用した地勢図・地形図は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の20万分の1地勢図、5万分の1地形図を複製したものである。

(承認番号：平6東復、第24号)


9. 調査の記録および出土資料は、福島県教育委員会で保管している。

用 例

1. 本書に使用した地形図の縮尺率は次のとおりである。

遺跡のトレンチ配置図 1/2,000(日本道路公団仙台管理局郡山管理事務所作成 東北自動車道平面図原図1/500を縮小使用)

2. 地形図中での遺跡の範囲を示す朱線の用例は次のとおりである。

予備調査結果による開発区域内的の遺跡範囲
破 線.....予備調査範囲
実 線.....予備調査結果による遺跡範囲

3. 予備調査にあたっては、1.5×10mのトレンチを基本として、トレンチの位置をトレンチ配置図にベタ黒で表示した。また、地形的な制約から一部に変則的なトレンチも設定した。配置図および本文中の「T」はトレンチの略称である。

本文および第6図土層柱状模式図に用いたLは、遺構外の自然堆積層を示す。

4. トレンチ内検出遺構図は1/80の縮尺で採録し、遺構部分は網点で表示した。

5. 遺物実測図の用例は次のとおりである。

縮 尺 率 土器実測図は1/3を原則として収録した。

土 器 断 面 土師器の断面は白ヌキ、須恵器の断面はベタ黒とした。

6. 本文中および整理作業で用いた遺跡の略号は次のとおりである。

郡 山 市 C Y

勝利ヶ岡遺跡 勝利ヶ岡遺跡

遺物ネーミング凡例：C Y—勝利ヶ岡遺跡10 T L II

(郡山市勝利ヶ岡遺跡・10トレンチII層)

目 次

第1章 調査経過	
第1節 遺跡の位置	9
第2節 調査経過	9
第3節 調査の方法	11
第2章 予備調査	14
第3章 まとめ	14

挿 図 目 次

第1図 位置図	1	第6図 土層柱状模式図	11
第2図 勝利ヶ岡遺跡の位置(1)	2	第7図 勝利ヶ岡遺跡遺構(1)	12
第3図 勝利ヶ岡遺跡の位置(2)	4	第8図 勝利ヶ岡遺跡遺構(2)	13
第4図 勝利ヶ岡遺跡1971年度出土土器	7	第9図 勝利ヶ岡遺跡出土遺物(1)	14
第5図 勝利ヶ岡遺跡トレンチ配置図	9	第10図 勝利ヶ岡遺跡出土遺物(2)	15

図 版 目 次

1. 勝利ヶ岡遺跡遠景(北から)	17	6. 61T全景(西から)	19
2. 勝利ヶ岡遺跡遠景(南から)	17	7. 勝利ヶ岡遺跡出土遺物(1)	19
3. 勝利ヶ岡遺跡東地区全景(北から)	18	8. 勝利ヶ岡遺跡出土遺物(2)	20
4. 68T全景(西から)	18		
5. 46T全景(南から)	19		

第1章 調査経過

第1節 遺跡の位置

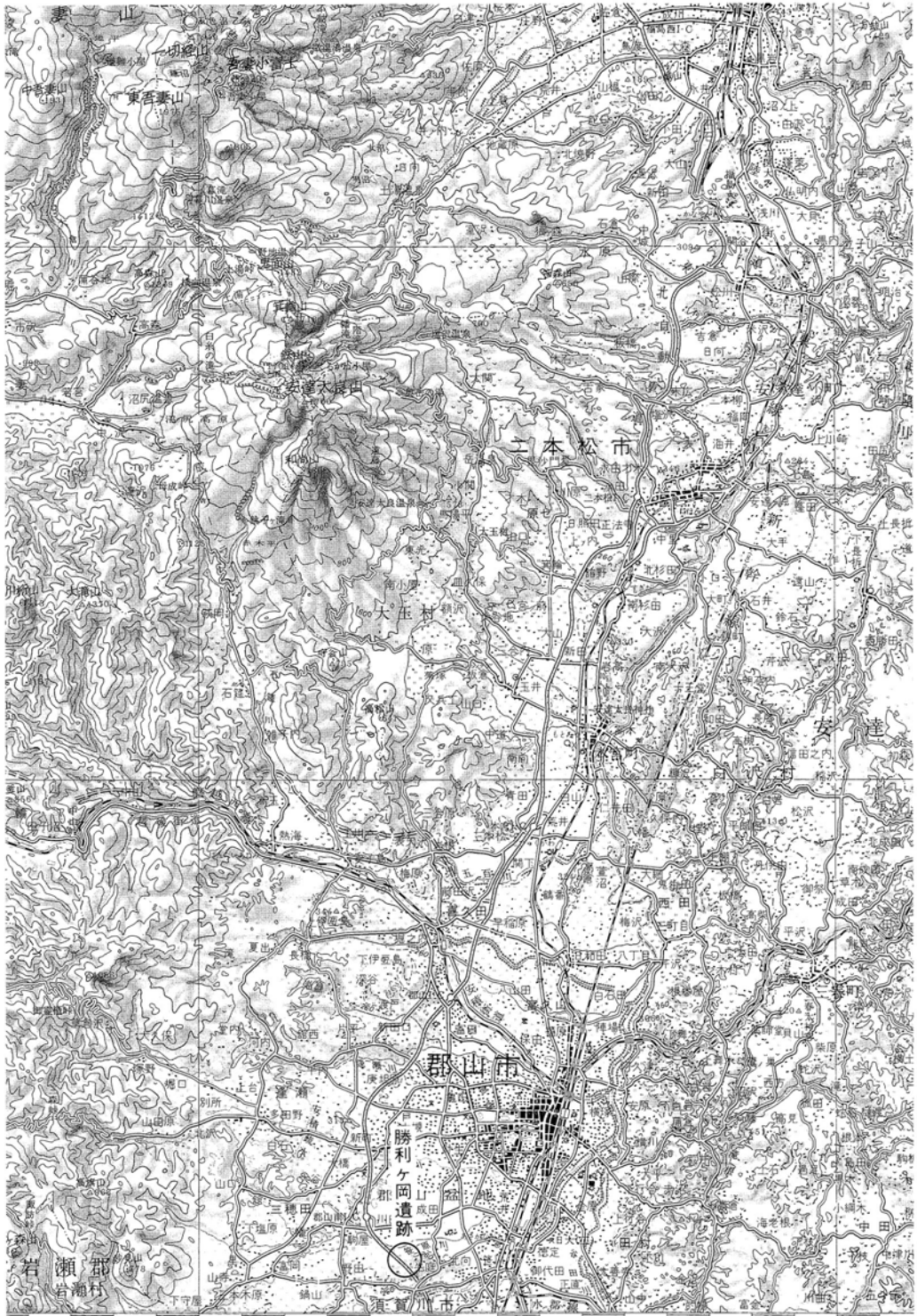
勝利ヶ岡遺跡は、郡山市三穂田町川田字勝利ヶ岡・字西白旗と同市安積町牛庭字社場谷地にまたがって所在する奈良・平安時代の集落遺跡である。遺跡は、昭和46年度に東北自動車道建設工事中に発見され、同年、福島県教育委員会が発掘調査（木本・高倉1975）を実施し、その結果、奈良・平安時代に属する竪穴住居跡を6棟検出している。調査地区は、須賀川インターチェンジと郡山南インターチェンジの間に所在する安積パーキング・エリアの南半部で、工事区域に限定した調査であったため、遺跡の広がりをとらえることはできなかった。

勝利ヶ岡遺跡は、昭和60年に作成された『福島県埋蔵文化財分布図』『福島県埋蔵文化財一覧表』（福島県文化財調査報告書第143-1・2集）では、同地が大ヶ馬場遺跡（縄文時代の散布地）として登録されており、勝利ヶ岡遺跡という名称は見当たらない。その後に行われた周辺地域での発掘調査報告書でも大ヶ馬場遺跡とされている。大ヶ馬場という小字名は、今回調査対象とした地域の北側約200mほど離れた所にあり、笹原川との崖線沿いに縄文後期前半の資料の散布が確認できる。今回の予備調査は、開発行為が昭和46年度調査区域の周囲が対象となること、現地調査の結果、上記の大ヶ馬場遺跡と位置が異なることから勝利ヶ岡遺跡として調査を行った。

勝利ヶ岡遺跡の所在する郡山市は、福島県のほぼ中央部に位置する県の産業経済の中心都市である。地形的には、南北に走る阿武隈川・奥羽脊梁山脈を境として、阿武隈川以東の阿武隈高地西縁部、阿武隈川から奥羽脊梁山脈までの郡山盆地、奥羽脊梁山脈と猪苗代湖の南に位置する湖南地区の3地域に大きく分割される。勝利ヶ岡遺跡は、このうち市の中心地域である郡山盆地南西部に位置している。郡山盆地の東部には、阿武隈川が北流しており、奥羽脊梁山脈を源として、北から五百川・逢瀬川・南川・笹原川などの河川が郡山盆地地面を開析しながら東流して阿武隈川に注いでいる。



第1図 位置図



第2図 勝利ヶ岡遺跡の位置(1) (国土地理院1/20万地勢図福島使用)

勝利ヶ岡遺跡は、笹原川南岸の河岸段丘上に立地しており、遺跡の標高は、西地区・東地区ともに中央部で252.50mほどである。笹原川は、三穂田町妙見山を水源地として安積町日出山で阿武隈川に合流する延長約20kmほどの小河川であり、遺跡の北側で岩瀬村方面から流れる鶴巻川が合流している。笹原川流域北岸では沖積面が発達し、三穂田町川田地区や安積町成田地区のように水田地帯が広がっている。南岸では、沖積面の発達は乏しく、大槻面や郡山面と区分される洪積統の丘陵が広がっており、丘陵の各所には小河川が分布して支谷の発達が著しく、舌状の台地が複雑に分布している。

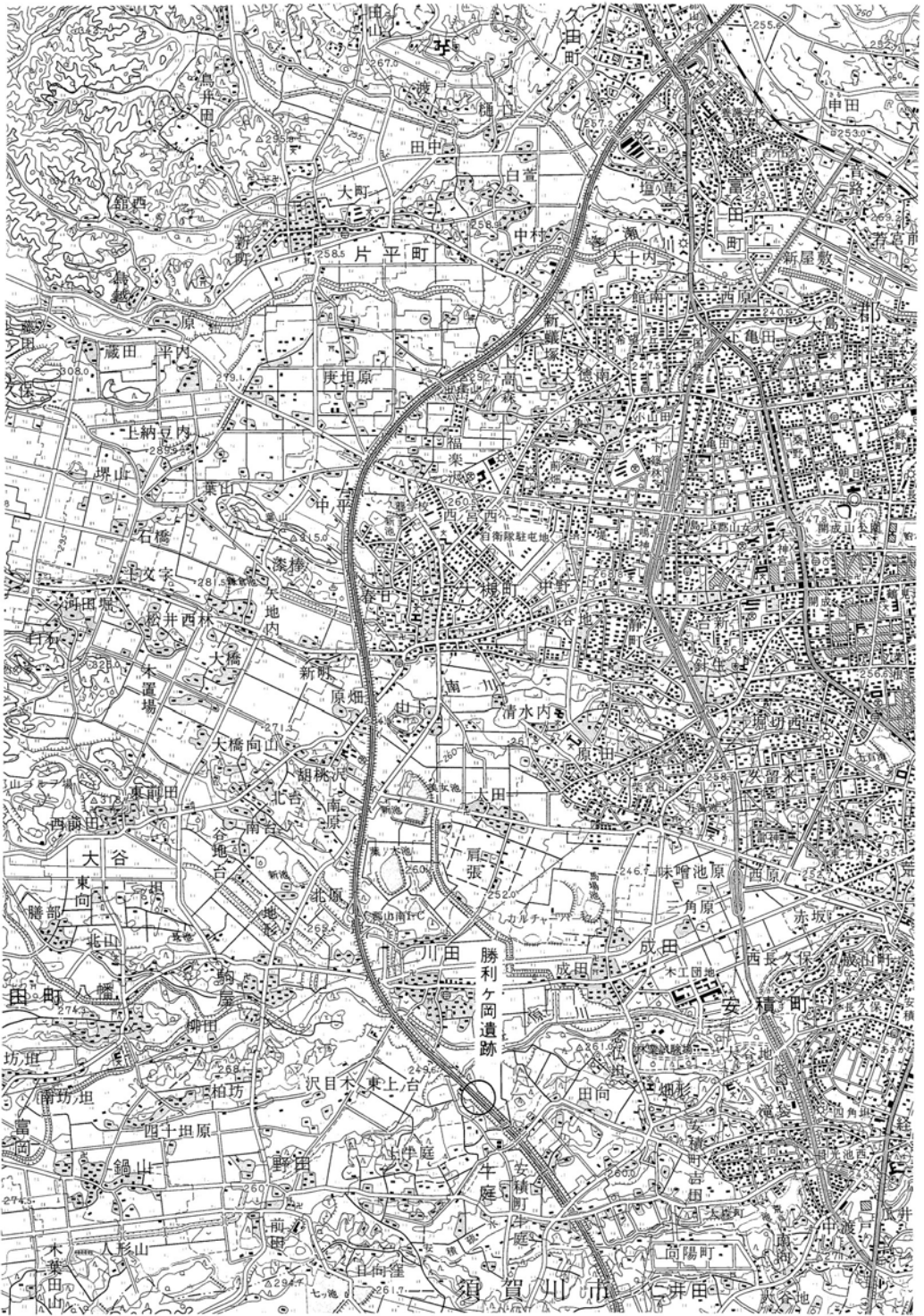
郡山盆地は、中生代の旧期花崗閃緑岩を基盤として第四紀の郡山層・大槻層などが堆積して形成されている。勝利ヶ岡遺跡の立地する台地は、大槻面に対比され、遺跡南部の一段高い部分は、郡山面に対比される。遺跡周辺は、水田や畑地、山林として利用されているが、明治時代に安積疎水が完成するまでは、ところどころの谷頭下に溜池が分布して水田が点在する他、多くは山林や畑地として利用されるにすぎなかった。明治18年作成の安積郡川田村地籍図を見ても、今回調査対象地域は、東地区が畑地、西地区が山林であり、東地区の北端部に水田がわずかに分布している程度である。現在は、遺跡の南約300m付近に安積疎水が付設されており、周辺地域の水田の灌漑用水として利用されている。

次に勝利ヶ岡遺跡周辺の考古学的な環境について触れてみよう。郡山盆地周辺では、これまで旧石器時代の資料が若干知られている。多くは採集品や単独で出土した資料であるが、遺跡の北東約7.5kmにある弥明遺跡（山内1992）からは、ナイフ形石器や角錐状石器などが出土しており、武蔵野編年Ⅱ a 期に比定される特徴ある石器群として注目されている。

縄文時代の遺跡としては、西方約2kmに位置する一人子遺跡（馬目・古川1970）が著名である。開田の際の発見資料であるが、縄文時代晩期から弥生時代にかけての中通りの基準資料として詳しい分析が行われている。勝利ヶ岡遺跡の東に位置する白旗遺跡では中期末の複式炉を有する竪穴住居跡が3棟発見され、北方約3kmにある壇ノ腰遺跡（吉田1975）は東北自動車道建設に伴って調査され、中期初頭の資料が出土している。周辺地域では、比較的縄文中期から後期前半の遺跡が分布しているようであるが、笹原川対岸の東丸山遺跡（鈴木1987）では縄文早期末や前期・晩期の資料が出土しており、隣接する丸山遺跡（押山1988）からは、縄文前期後半の資料がまとめて出土している。

弥生時代の遺跡は、一人子遺跡で前期御代田式段階の資料が発見されており、北方5kmの大槻地区には、柏山遺跡（目黒1966）や福楽沢遺跡（須藤1970）の弥生中期後半の墓跡や弥生土器の基準資料を出土した遺跡が分布し、また東丸山遺跡・丸山遺跡からは、中期後半の二ツ釜式の資料が若干出土している。

古墳時代の遺跡は、勝利ヶ岡遺跡対岸の丸山遺跡や東丸山遺跡が注目される。東丸山遺跡では



第3図 勝利ヶ岡遺跡の位置(2)(国土地理院1/5万地形図郡山使用)

古墳前期の方形周溝墓が6基発見されたのをはじめ、古墳時代、奈良～平安時代の集落が多数検出されている。丸山遺跡では、古墳時代中期から後期にかけての竪穴住居跡が25棟検出され、石製模造品も若干出土しており、時期的に1992年に(財)福島県文化センターが調査を行った正直A遺跡と関連するものである。

古代には、郡山盆地の多くは、陸奥国安積郡として行政的に区画されていた。安積郡は清水台遺跡を郡衙として、北は五百川から南は笹原川までを郡域としていたと推定されている。これを基にすれば、笹原川南岸に位置する勝利ヶ岡遺跡は、石背郡に属することになろうか。周辺には、転沢遺跡や白旗遺跡などの奈良～平安時代の遺跡が分布し、笹原川対岸の原田周辺には、清水台遺跡に供給したと推定される原田・花輪窯跡などの瓦窯跡が分布(戸田1987)している。

第2節 調査経過

東北自動車道須賀川インターチェンジ・郡山南インターチェンジ間にある安積パーキングエリアは、上下線ともにわずかなスペースの駐車場と手洗いを有する小規模な休憩施設である。近年、磐越自動車道の部分開通やモータリゼーションの高次化による交通量の増加に伴い、慢性的な駐車エリア不足が生じ、付近の鏡石パーキングエリアや阿武隈パーキングエリアに車両が集中する現象が起こっている。周知のように平成7年度には、第50回国民体育大会が福島県を会場として開催されることもあり、それに向けて磐越自動車道いわき～郡山間の工事も急ピッチで進められている。また観光地を控えた磐越自動車道の福島県内全線開通を迎えれば、東北自動車と合流する郡山ジャンクションから東京方面に向かって最初の休憩所となる安積パーキングエリアのはたす役割は大きなものとなる。日本道路公団では、この駐車エリア不足の解消と売店・給油施設の新規建設を目的として改良計画を策定した。

福島県教育委員会では、開発区域に昭和46年に発掘調査した勝利ヶ岡遺跡が広がっている可能性があるため、遺跡の現況確認と保護策を検討し、平成5年3月に福島県教育庁文化課・日本道路公団郡山管理事務所・(財)福島県文化センター(以下、県文化センターと略す)事業第2部遺跡調査課3者の担当職員で事前協議を行い、現況が水田や山林であり正確な表面調査ができない状況であるが、東地区の一部では土師器の散布が確認されるところから、開発区域全域について平成5年度に予備調査を実施して遺跡範囲を確定し、開発計画との調整を行うこととした。

平成5年4月、福島県教育委員会は、開発区域全域45,000㎡の予備調査を県文化センターに委託した。県文化センターでは、事業第2部遺跡調査課の職員を配置して、勝利ヶ岡遺跡の予備調査を実施した。予備調査は、4月から準備に入り、西地区の一部で用地問題が未解決となっているため2次に分けて実施したが、7月末までに調査対象とした開発区域全域について現地調査を

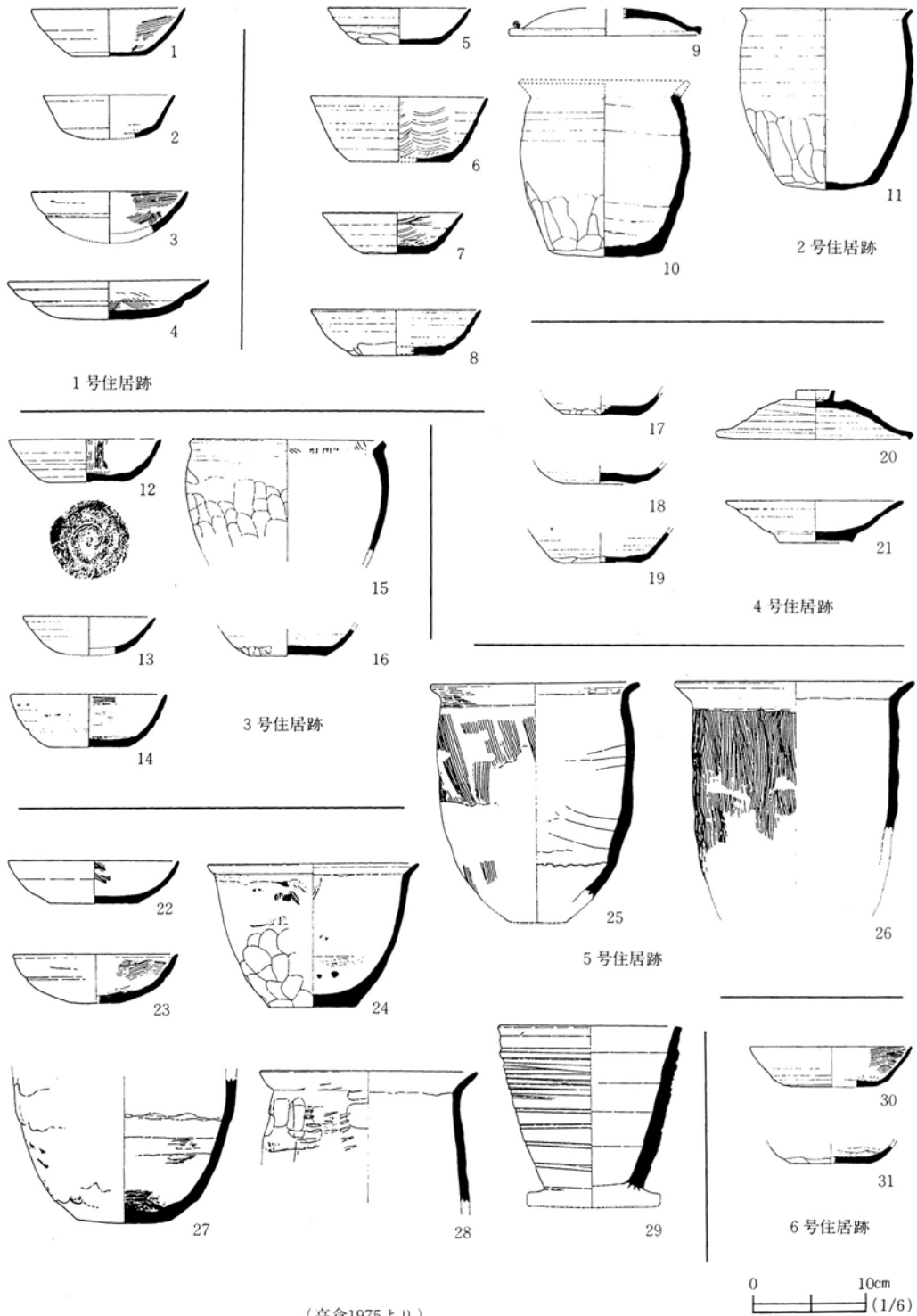
終了した。

調査区域全域の予備調査終了の後、県文化センターでは、調査結果により遺跡の範囲について関係職員で再検討して、その結果を福島県教育委員会に報告した。福島県教育委員会では、工事計画との調整をはかるため中間報告を日本道路公団郡山管理事務所に提出した。日本道路公団では、中間報告を基に工事計画との調整を行い、今後の工事計画と遺跡範囲および調査計画の協議を行った。協議は、予備調査により発掘調査が必要と判断された地区については、平成6年度に福島県教育委員会が発掘調査を実施することと、平成5年度後半に、遺跡周辺地区について工事が開始されるため、開発区域と遺跡との保護調整が協議された。平成6年度に発掘調査が実施される区域の現状保存を図り、後に関係者によって現地調査区域の縄張りを実施することが確認された。縄張り作業は、平成6年1月18日に3者および工事受注業者が立ち会って実施した。その後、福島県教育委員会では、平成6年度の調査実施に向けて関係機関との事務調整を行っている。

第3節 調査の方法

予備調査は、対象地域の現況が水田と篠竹が密集した山林であるため、表土から手掘りで行うのは極めて困難と判断されたため、表土の除去は、バックホーを用いて実施した。調査はトレンチ法を用いて行い、開発区域全域に1.5×10mのトレンチを105本、1.5×5mのものを3本の都合108本を設定した。トレンチの設定方向は南北を基本として行ったが、一部の地域では、地形や木の根の制約のために不規則な配置となった。

重機による表土除去の後に、作業員を投入して遺構の検出作業を実施した。東地区の水田部では、この作業の際に出水があり、排水作業を行いながら遺構検出作業を進めた。遺構検出作業では、遺構かどうか判断に著しむ黒色土の落ち込みが多かったため、部分的に性格や時期を推定する意味で部分的な断ち割りも行っている。遺構検出作業の後に、写真撮影および遺構の実測、土層観察を行い、トレンチカードを作成し、1/1,000の地形図にトレンチの位置を測量して記録した。遺構の発見されたトレンチについては、1/40で遺構カードを作成し、写真については、モノクロの35mmフィルムで撮影した。



(高倉1975より)

第4図 勝利ヶ岡遺跡1971年度出土土器

第2章 予備調査

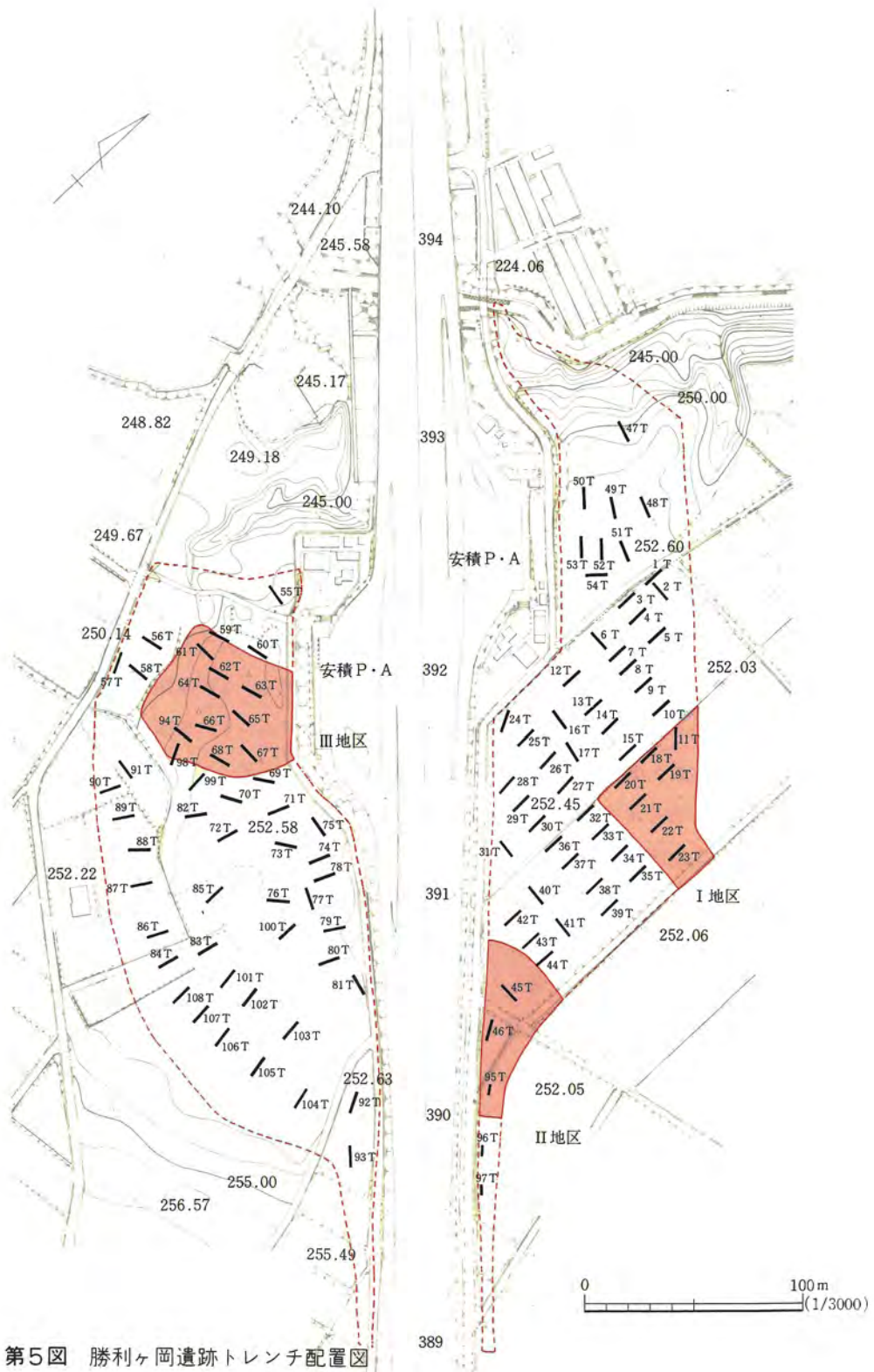
概要 予備調査は、開発区域の全域にわたって実施したが、調査地区が高速道路によって中央で分断されるような形となっているため、便宜上、高速道路を境として東地区と西地区と区別して行った。調査を進める上で、昭和46年度の調査の状況を検討したところ、この際の調査地区は第5図に示した高速道路中央のポイント391付近となっている。調査は、東地区の北端の部分から開始して南へ向かって進めた。特にポイント391に近接した部分の調査は慎重に実施した。トレンチの番号は、原則として調査開始の順に付けていった。

遺構・遺物 基本層序は調査地区によって異なっている。東地区の北側から順番に観察している。48～54 Tを設定した部分は、現況では造成され平坦地であったが、調査して見ると、50 Tでは、地表下約3 m付近まで土砂が盛られており、52 T以北の部分は、鶴巻川に面した斜面に造成のため土砂が盛られているものと判断された。52 T付近から南は、約50cmほどの盛土の下部で旧表土が発見され、約10cmの黒色土が堆積し、以下は黄褐色を呈する粘土質のLIIIとなる。この部分では、遺構や遺物は全く発見されなかった。

1～46 T、95～97 Tを設定した部分は、現況が水田であり、北から南に向かって緩やかに標高を増している。土層堆積は、基本的にL Iが表土層、L IIが黒色土層、L IIIが黄褐色土もしくは黄色白色粘土層となっている。表土層は、水田耕作の層で、どの部分でも約20～30cmの厚さで堆積している。黒色土は1 Tで約20cmの厚さで堆積し、14 Tで40cm、29 Tで20cm、38 Tで70cmと場所によって異なっていることが判明した。それぞれのトレンチを総合的に判断してみると、13・15 T間と35・44 T間に埋没した小支谷があることが確認された。14 T付近のものは、48 T東側の谷から延びるもので、後者は、35 Tの東側から延びてくるもので、谷頭は29 T付近と考えられる。このように一見平坦な地形であるが、調査の結果、複雑な地形であることが判明した。同様に西地区でも中央部の丘陵周囲の91～93 Tにかけては、南北に長い小支谷があることが判明している。

西地区では、丘陵部は山林であり、表土以下に黒色土の堆積はほとんど確認されず、黄褐色のL IIIとなる。表土の堆積は、64 Tで約20cm、69 Tで約30cm、79 Tで約30cmである。一方、小支谷の部分である56 Tでは、表土以下に水分を多く含むグライ化した黒色土が約80cmほど堆積しており、106 TではL IIの黒色土が約60cm堆積しており、水分を多く含んで地表面も軟弱になっている。明治18年の地籍図では、西地区の小支谷の谷頭に、現在の高速道路付近に該当すると思われるが、溜池が1か所存在している。

東西両地区の埋没している地形の比較は、高速道路に分断されているため容易ではないが、後



第5図 勝利ヶ岡遺跡トレンチ配置図

述する調査の結果、遺跡の範囲と区画した区域も加味すると以下のように判断される。

西地区の丘陵部は、東地区の26 T付近にまで延びているものと判断される。この丘陵の東端部に昭和46年度の調査地区の住居跡群が分布していた。これと今回発見された後述のⅢ地区との関係は、中間部分が不明なため確実ではないが、時期的には関連するものであろう。今回の調査で後述のⅠ地区とした部分は、西側と南側に谷が走り分断されている。Ⅲ上面の傾斜も北→南である。発見された遺構の時期は、他の2地区よりも古い段階のものであり、地形的にも時期的にも区別される。ただし昭和46年度の調査で、5号住居跡からⅠ地区と関連する時期の資料が出土しており注目される。後述のⅢ地区とした部分は、その延びが高速道路部分に広がるのは確実であり、西地区の丘陵からの続きの地形であろう。このように見てくると、複雑に入り組む小支谷の周囲に集落が形成されていると判断されよう。

次に遺構や遺物が検出されたトレンチは次のとおりである。

竪穴住居跡 6棟(18・46・61・68・98 T, うち68 Tは2棟)

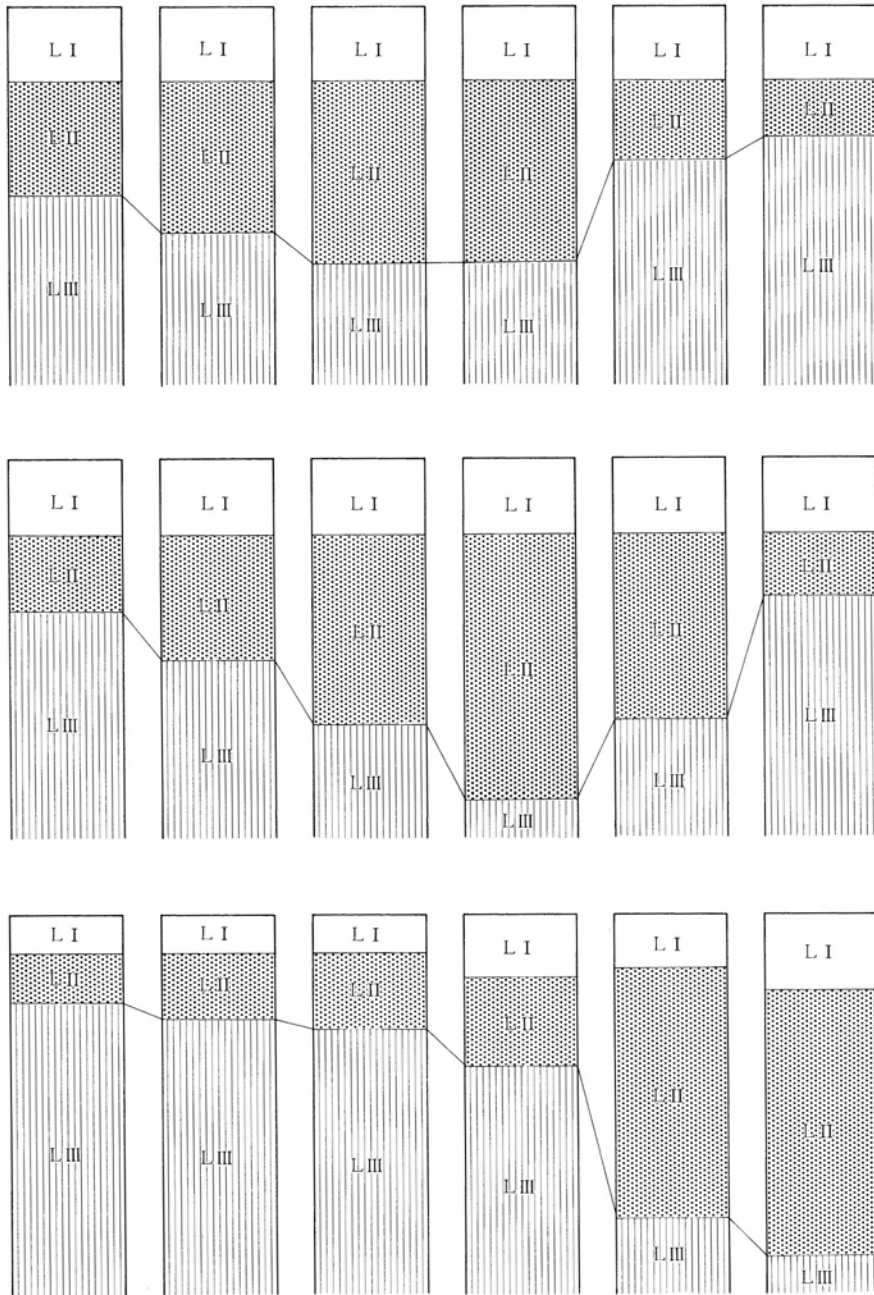
掘立柱建物跡 2棟(21・22 T)

土 坑 6基(11・45・63・67・98 T, うち11 Tは2基)

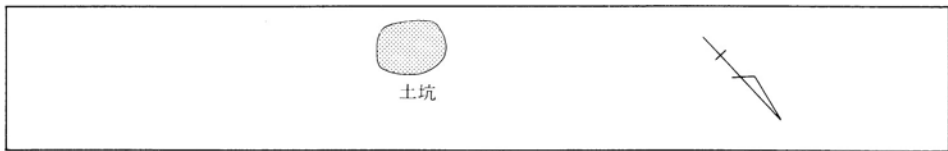
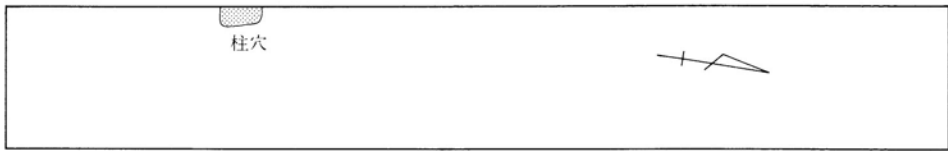
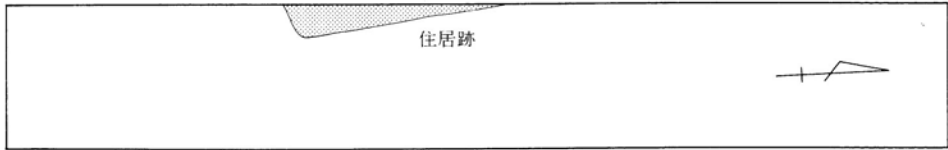
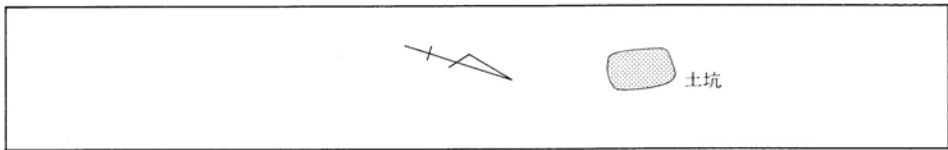
18 Tでは、トレンチの中央部の西壁付近で竪穴住居跡が1棟検出されている。プランは方形と推定されるが、規模は不明である。住居跡の確認面からは第9図1～3の粟囲式段階の土師器が出土している。このトレンチ周辺ではロクロ土師器が発見されておらず、粟囲式期の竪穴住居跡や21・22 Tで検出された掘立柱建物跡(時期不明)等が分布するものと推定される。第5図に示したように遺物の分布や地形を考慮して2,060㎡の範囲が開発に先だって本調査が必要と判断される。この地区をⅠ地区とする。

46 Tの竪穴住居跡は確認された部分では南北4 mほどの規模をもつ方形プランと考えられる。確認面からは焼土や土師器が多数発見されており、出土した土師器は第9図4～16、第10図1・2に示した。杯は内面に黒色処理を施したロクロ土師器で、体部下半部に回転ヘラケズリを行っている。底部も回転ヘラ切りによって切り離されているものがほとんどである。第10図2は器壁の厚い杯で、体部下半に回転ヘラケズリが行われている。回転ヘラケズリは、体部中央部にまで及ぶものがあり、8世紀末に位置づけてよいであろう。第5図に示したように1,540㎡の範囲について、本調査が必要である。この地区をⅡ地区とする。

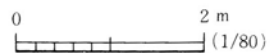
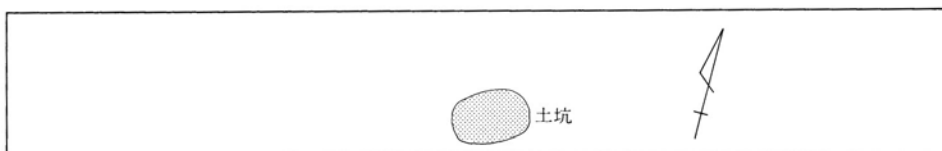
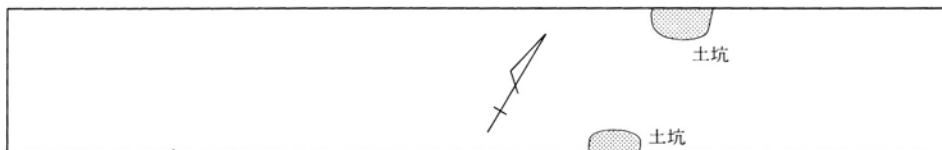
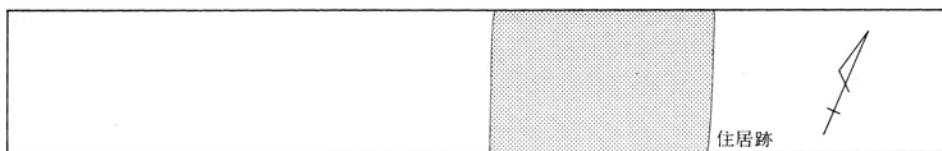
西地区では、61・68・98 Tの斜面西側に設定したトレンチで竪穴住居跡が発見されている。斜面上部の平坦面では土坑や遺物が検出されている。住居跡からは、時期決定となる遺物が発見できなかったが、この地区の出土遺物がロクロ土師器を中心とすることや、61 Tで発見された竪穴住居跡ではカマドが検出されているところから8・9世紀段階の集落と考えておきたい。この地区では第5図に示した3,350㎡について本調査が必要である。この地区をⅢ地区とする。



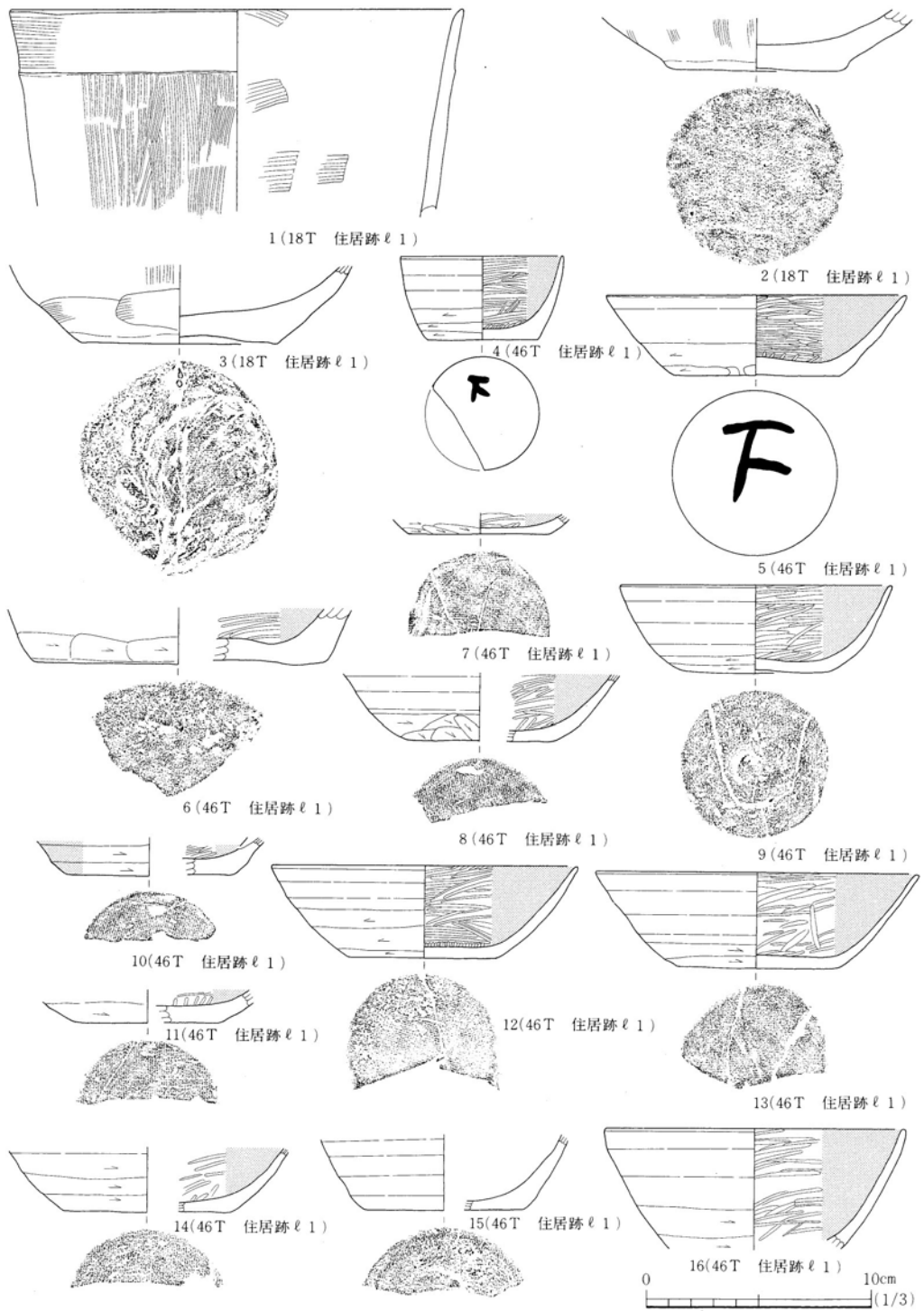
第6図 土層柱状模式図



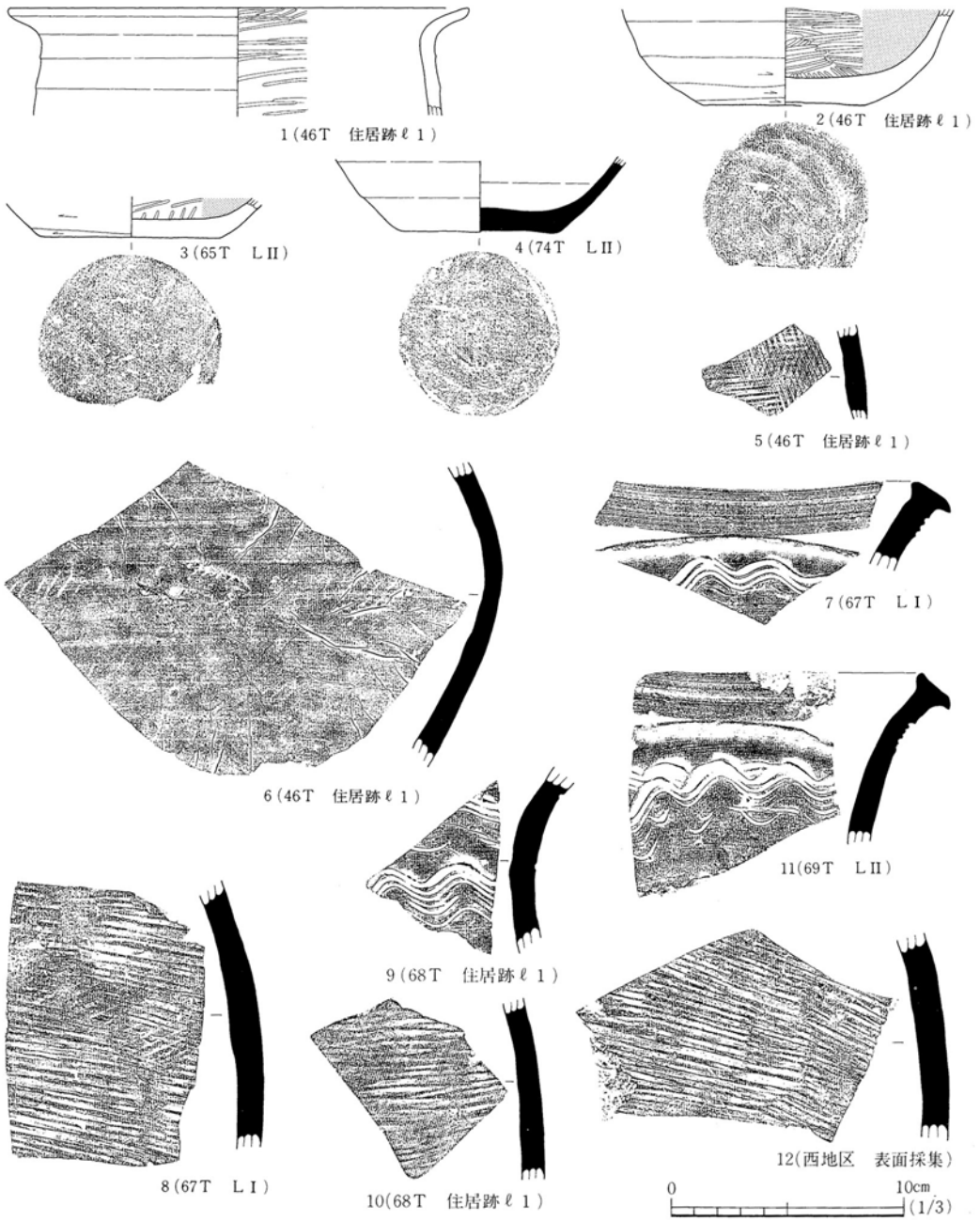
第7図 勝利ヶ岡道跡遺構(1)



第8図 勝利ヶ岡遺跡遺構(2)



第9図 勝利ヶ岡遺跡出土遺物(1)



第10図 勝利ヶ岡遺跡出土遺物(2)

第3章 まとめ

今回の勝利ヶ岡遺跡の予備調査結果、開発に伴い今後本調査が必要と判断されたのは次のとおりである。

東地区 I地区 2,060㎡

II地区 1,540㎡

西地区 III地区 3,350㎡

両地区で確認された3地区の本調査面積を合わせると6,950㎡である。出土した遺構・遺物から判断すると、I地区は、7世紀の集落跡、II地区は8世紀末の集落跡、III地区は8・9世紀の集落と推定される。今後の調査により、小支谷を取り巻く古代の集落の在り方が明らかになってくるものと期待される。

参 考 文 献

- 押山雄三 1988 「丸山遺跡」『郡山カルチャーパーク関連報告』第2集
- 木本元治・高倉敏明 1975 「第19編 勝利ヶ岡遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告』福島県文化財調査報告書第47集
- 須藤 隆 1970 『郡山市福楽沢遺跡発掘調査報告書』
- 戸田有二 1970 「古代陸奥国推定安積郡衙跡出土古瓦とその供給瓦屋」『郡山市文化財研究紀要』第4号
- 福島県教育委員会 1985 『福島県埋蔵文化財分布図』『福島県埋蔵文化財一覧表』
- 馬目順一・古川 猛 1970 『一人子遺跡』
- 目黒吉明 1966 『新産都市指定地区遺跡発掘調査報告書』
- 吉田幸一 1975 「第2編 壇ノ腰遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告』福島県文化財調査報告書第47集



1 勝利ヶ岡遺跡遠景（北から）



2 勝利ヶ岡遺跡遠景（南から）



3 勝利ヶ岡遺跡東地区全景（北から）



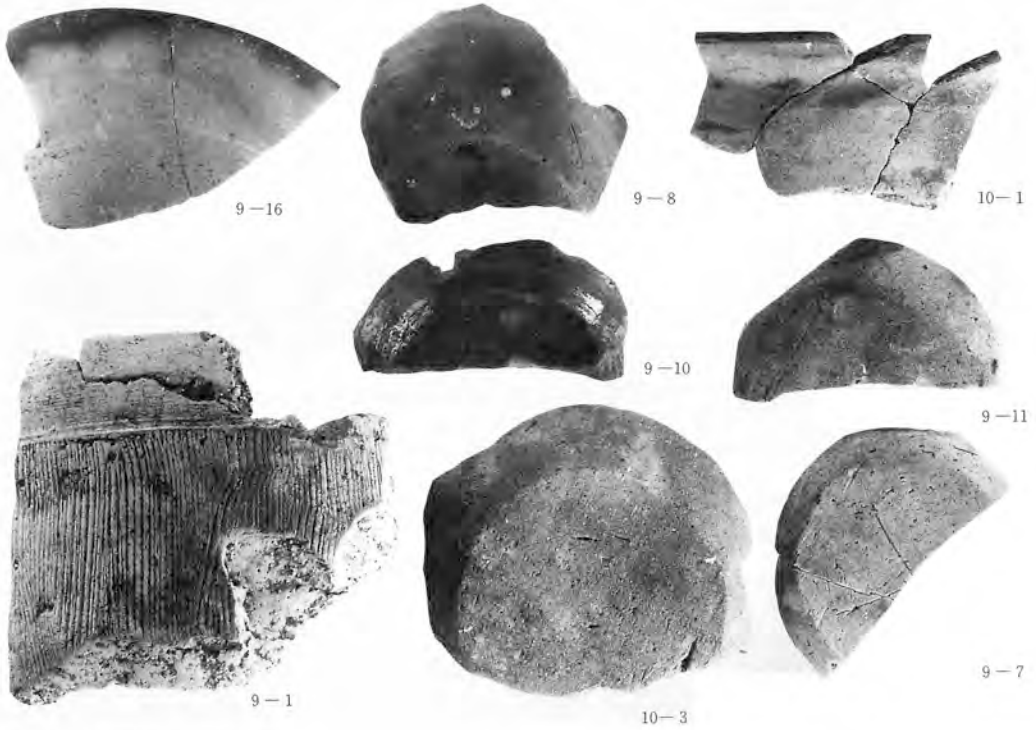
4 68T全景（西から）



5 46T全景（南から）



6 61T全景（西から）



7 勝利ヶ岡遺跡出土遺物（1）



9-9



9-5



9-12



10-2



9-4



9-3

8 勝利ヶ岡遺跡出土遺物(2)

福島県文化財調査報告書第301集

安積P.A拡幅改良事業東北自動車道遺跡予備調査報告

平成6年3月25日発行

編 集 助福島県文化センター（遺跡調査課）
（〒960）福島市春日町5-54

発 行 福島県教育委員会 （〒960）福島市杉妻町2-26
助福島県文化センター（遺跡調査課）

印 刷 株 川 島 印 刷 （〒992）米沢市大字花沢221-2

本報告書は中性紙を使用します。

〔本文 新王子製紙㈱ サンファンジークリーム 90kg〕
〔図版 日本製紙㈱ グイヤコート 135kg〕